

全盲の棋士も対局 福祉囲碁東京大会

障害者・高齢者施設や個人宅に、囲碁の相手をするボランティア棋士を派遣する日本福祉囲碁協会（佐野利昭会長、東京都渋谷区）は10月19日、都内で福祉囲碁東京大会を開いた。訪問先の人ら約80人が参加。身体・知的障害などのある人も障害種別を超えて対局した。

参加者の4分の1は視覚障害者のため、碁盤に引かれる縦横の線が浮き出た盤が多く使われた。線の交差するところに溝が付いた碁石をはめるため、手で石の場所を把握してもずれない。黒石の表面には突起があり、白石と区別できる。

選手の一人、有段者のそろう部で対局した柿島光晴さん（38）は全盲。約12年前に囲碁を扱ったアニメ

「ヒカルの碁」を聞いて興味を持ち、同協会の派遣利用などを経て、現在は自らボランティアを務める。

会場にあった視覚障害者用の碁盤は柿島さんが改良したもの。裏返すと、初心者がルールを覚えるのに役立つ小さい盤が付いている。視覚障害者に囲碁を広めようと、最近は改良した碁盤を台湾の盲学校に寄贈した。将来は全国の盲学校に碁盤を配り、囲碁を広めたいという。

同協会は設立35年。ボランティア会員数は約250人に上る。佐野会長はあいさつで「囲碁は認知症の予防にも効果的と言われる。これからも親しむ機会を提供できるよう努めたい」と語った。

（福祉新聞・第2736号 2015年10月26日）

障害者が語る戦争体験

日本障害者協議会（JD）、戦後70年でシンポ

日本障害者協議会（JD）は8月28日、「戦後70年と障害者～わたしたちには聴こえます！ 戦争の足音が」と題するシンポジウムを憲政記念館（東京都）で開き、約500人が参加した。沖縄戦と「晩発性の心的外傷後ストレス障害（青壮年期には何事もなく、晩年に発症するもの）」を研究する蟻塚亮二・メンタルクリニックなごみ院長（精神科医・福島県）が基調講演したほか、戦争体験のある障害者らがそれぞれ体験談を披露した。

戦後、小学生の時に不発弾の爆発で両手首と両眼の視力を失い、弟が即死した体験を持つ藤野高明さん（76・大阪府）は、「私は事故後13年間就学を拒否された。私はいま、子供たちの未来に計り知れない不安を感じている。若い人には戦争と障害のことを自分のことだと考えてほしい」と話した。

聴覚障害のある水野ミサさん（89・東京都）は、故郷の新潟県でろう学校に通っていた時の空襲を手話で説明。「自分のすぐそばに焼夷弾が落ちておなかをやけどした。周りは死体や内臓の飛び出た人だらけで地獄だった。これからは手話通訳をさらに発

展させて、差別のない社会になってほしい」と話した。

肢体不自由児学校の元教員で、障害児の学童疎開に詳しい松本昌介さん（79・東京都）は、「子供たちは疎開先で栄養不足で苦しんだ。障害者が一人で生きていくのは難しい。今の若い人にはたくさん学んでほしいし、障害のある仲間を一人きりにしてはいけないと言いたい」と話した。

蟻塚医師の講演要旨

沖縄戦を生き延びた人を診察して気付いたのは、不条理な死別による複雑性の悲嘆と、生活の場を失うことによる根こそぎのうつ病（人格を傷つけ、トラウマが後の世代に伝達される）だ。「2年前の息子の死によって戦時中の死体のおいを思い出し、不眠になった80歳の女性」「クリスマスやアメリカという言葉だけで体がざわざわする70代前半の男性」などを診てきた。沖縄戦はまだ終わっていない。戦争は障害者を作る。戦後70年の今年、障害者がどう生きていくべきか考える機会にしたい。

（福祉新聞・第2732号 2015年9月21日）